

2024 年度フィールドネット・ラウンジ企画 セミナー

実施報告書*

企画名：イスラーム圏に交響するイブン・アラビー思想

企画責任者：末野孝典（日本学術振興会特別研究員 PD）

アドバイザー：澤井真（天理大学准教授）

日時：2025 年 1 月 25 日（土曜日）13：00～18：30

場所：本郷サテライト（4 階セミナールーム）

主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）、科研・特別研究員奨励費「近現代の西アフリカ・イスラーム思想史研究の構築：クルアーン解釈書の分析から」（研究代表者：末野孝典（東京大学）、課題番号：22KJ1192）

プログラム：

13:00-13:05 開会の辞：

品川大輔（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

13:05-13:15 趣旨説明：

「イブン・アラビー思想研究の過去と現在」

末野孝典（日本学術振興会特別研究員 PD）

【セッション 1：イブン・アラビー思想研究の新展開】

13:15-13:35 報告 1：

「イブン・アラビーにおける円環的世界」

藤原路成（東京大学）

13:40-14:00 報告 2：

「イブン・アラビーにおける自己認識論」

ガーダ・サイード（東京大学）

14:05-14:25 報告 3：

「イブン・アラビー思想における文字と名前のダイナミクス」

澤井真（天理大学）

* 本報告書の一切の文責は、企画責任者である末野に帰せられる。

14:25-14:45 質疑応答

14:45-15:00 休憩

【セッション2：イブン・アラビー思想の地域的展開】

15:00-15:20 報告4：

「ムガル朝におけるイブン・アラビーの思想的影響——ムヒッブラー・イラーハーバーデーの注釈群からの考察」

森口遥平（京都大学）

15:25-15:45 報告5：

「南アジアのイブン・アラビー学派における汎神論思想」

本間流星（京都大学）

15:45-16:00 質疑応答

16:00-16:10 休憩

16:10-16:30 報告6：

「知と愛の邂逅——イラーキーにおけるイブン・アラビー思想の展開」

井上貴恵（明治大学）

16:35-16:55 報告7：

「引用・解釈・操作——イブン・アラビーとイブラーヒーム・ニヤースの思想的連関」

末野孝典（日本学術振興会特別研究員 PD）

16:55-17:10 質疑応答

17:10-17:20 休憩

17:20-18:05 全体コメント

17:20-17:35 コメント1：

東長靖（京都大学）

17:35-17:50 コメント2：

小倉智史（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

17:50-18:05 コメント3：

鎌田繁（東京大学）

18:05-18:25 総合討論

18:25-18:30 閉会の辞：

澤井真（天理大学）

企画の狙い

本シンポジウムは、アンダルス出身の思想家イブン・アラビー（1240 年没）を軸として設定し、イスラーム神秘思想の問題系を明らかにすることを目的とした。今現在、イブン・アラビー思想研究は、彼自身のテキスト分析と後代における彼の思想的影響力を中心に研究が推し進められている（ex. Chittick 1989; Chodkiewicz 1991; Ali 2021）。具体的に言えば、前者は彼が晩年に完成させた二つの代表作『叡智の宝石』（*Fuṣūṣ al-ḥikam*）と『マッカ開扉』（*al-Futūḥāt al-Makkīya*）のテキスト分析に重点が置かれ、彼の思想体系をより具体的に明らかにすることが目指されてきた。それに対して、後者はイブン・アラビーに遡及できる弟子筋の思想家に焦点が当てられ、さまざまな地域で活躍した彼らが「師」の思想をどのように受容し、（再）解釈してきたのかが探究されてきた。しかし、両者の研究領域は、議論の方向性が異なることも相俟って、研究上の緊密な連携がさほど取られてこなかった。その結果、イスラーム思想史におけるイブン・アラビー思想の重要性に比して、ひとつの研究領域としての方法論的な課題や横断的な論点を共有することは世界的にも為されてこなかった。

また日本においては、井筒俊彦によるイブン・アラビーの『叡智の宝石』のテキスト分析をもとに東洋哲学の構築を目指した研究、東長靖が中心となってイスラーム圏の各地域で活躍したイブン・アラビー思想の影響網の見取り図を描こうとした基礎的な研究がある（井筒 2019; 東長・中西 2010）。しかし、これらの研究は個別に為されており、イブン・アラビー思想を論じる共通の基盤を欠いてきたともいえる。

さらに言えば、これらの研究には偏りが見られる。例えば、イブン・アラビーが書き残したテキストを分析する研究は、初期や中期の作品群を分析する視座が蔑ろにされているきらいがあり、後代におけるイブン・アラビー思想の影響網を捉えようとする研究は、時代的・地域的偏差を議論する段階までには達していない。

こうした現状を踏まえて、本企画では、イブン・アラビーとその学派に属する思想家を研究している若手研究者を一堂に会してそれぞれの事例報告を行うことで、イブン・アラビー思想の論点を改めて見定めると同時に、その問題系を浮き彫りにさせることを目的とした。具体的には、「イブン・アラビー思想研究の新展開」と「イブン・アラビー学派の地域的展開」という二つのセッションを組み、具体的な論点の共有を図った。さらにコメンテーターには、イスラーム神秘思想研究の立場から鎌田繁氏、イブン・アラビー学派研究の立場から東長靖氏、南アジアのイスラーム思想の立場から小倉智史氏を招聘した。これまでの研究蓄積を踏まえたイブン・アラビー思想研究の新たな展開の方向性を索ることを目指した。

引用文献

井筒俊彦 2019『スーフィズムと老荘思想——比較哲学試論』上巻（井筒俊彦英文著作翻訳

- コレクション) 仁子寿晴訳、慶應義塾大学出版会。
- 東長靖・中西竜也編 2010『イブン・アラビー学派 文献目録』京都大学イスラーム地域研究センター。
- Ali, Mukhtar A. 2021. *Philosophical Sufism: An Introduction to the School of Ibn al-‘Arabī*. London: Routledge.
- Chittick, William C. 1989. *The Sufi Path of Knowledge: Ibn al-‘Arabi’s Metaphysics of Imagination*. Albany: State University of New York Press.
- Chodkiewicz, Micheil. 1991. “The Diffusion of Ibn Arabi’s Doctrine.” *Journal of the Muhyiddin Ibn ‘Arabi Society*, Vol. 9, pp. 36–57.

発表要旨

【セッション1：イブン・アラビー思想の新展開】

報告1：

「イブン・アラビーにおける円環的世界」

藤原路成（東京大学・院生）

藤原氏の発表では、イブン・アラビー（1240 年没）の主著『叡智の宝石』アードム章の冒頭箇所を、『マッカ開扉』を用いて解釈することを試みた。註釈書に基づいた『叡智の宝石』研究はそれなりに蓄積がある一方で、同じく主著とみなされる『マッカ開扉』を通じた『叡智の宝石』読解はほとんど進んでいない。本報告では当該箇所の記述を、並行的な議論を行っている『マッカ開扉』の記述と対照させることで、神と完全人間の円環的ビジョンがそこで暗示されていることを明らかにした。従来、学派思想家の解釈を通じて理解されてきた当該箇所をイブン・アラビー自身に即して読解しようとするこの試みは、本シンポジウムの趣旨であるイブン・アラビー思想と学派思想の共通点と相違点の一端を照らし出している。

報告2：

「イブン・アラビーにおける自己認識」

ガーダ・サイド（東京大学・院生）

ガーダ氏の発表では、アヴィセンナを中心としたイスラーム哲学における自己認識のモデルを背景に、イブン・アラビーの自己認識のモデルが論じられた。アヴィセンナは「真の自己」を魂とし、「私」の意味がそこに基づくと考えたが、イブン・アラビーは固定された「真の自己」の存在を否定した。イブン・アラビー思想は「存在一性」が代表的であるが、彼は関係性の中でしか存在しえない人間は、一性とは関連性がないとした。イブン・アラビーは魂を真の自己ではなく、変容の場であるとした。魂は留まることのない神の顕現と同一化し、変容し続けるが、「真の神」や「真の自己」がそこに固定されているのではなく、その留まらなさ自体が神を示していると考えた。イブン・アラビーの自己認識において、「私性」の完全な融合は不可能であり、人間の「私性」は関係性の中にのみあることを提示した。また、その関係性の中で、融合と分離が繰り返される動的なものであるというモデルが考案された。

報告3：

「イブン・アラビー思想における文字と名前のダイナミクス」

澤井真（天理大学）

澤井氏の発表では、イブン・アラビーが論じた文字と名前の関係性について、『ミーム・ワーウ・ヌーンの書』と『叡知の宝石』を中心に論じられた。イスラーム思想において、文字に関する議論は文字論の文脈で論じられる一方で、名前に関する議論は神名論の文脈で論じられてきた。イブン・アラビー思想においては、文字論と神名論、さらにそれらを踏まえた人名論は不即不離の関係性にある。アラビア語のミーム、ワーウ、ヌーンの文字は、アラビア語表記に基づいて「円環文字」と呼ばれている。イブン・アラビーは文字が名前に先立つと言及していることから、名前として存在化する「もの」を文字レベルにおいても捉えていることが分かる。最初の人間アダム（Adam）と最後の預言者ムハンマド（Muhammad）には、それぞれミームという文字が含まれている。イブン・アラビーによれば、この「ミーム」（mīm, ميم）という文字に含まれる「ヤー」（ي）が原因となって、存在の息吹が生じるという。ムハンマドの存在的先行性と、アダムの時間的先行性をつなぐことで、始まりと終わりがさらなる円環でつながれている。このように、具体的な名前を文字レベルから論じることで、名前を通した「もの」の存在化のダイナミクスが論じられている。

質疑応答

鎌田氏から藤原報告に対して、井筒俊彦のイブン・アラビー理解についての質問があった。藤原氏は井筒が『スーフィズムと老荘思想』のなかで、後代における『叡智の宝石』の注釈書を参照しつつ論じていると述べたが、鎌田氏から井筒自身は極力イブン・アラビー自身に添って論じているのではないかとの疑義が呈された。それに対して、確かに井筒はそのような態度も表明している一方で、『マッカ開扉』への明示的な参照はほとんどなく、どの程度彼が当該著作を読み込んでいたのかについては今後の課題であるとの回答がなされた。ガーダ氏に対する発表については、フロアから靈魂が機能する場や私性の位置づけなどについて確認がなされた。澤井報告に対しては、小倉氏からイブン・アラビーの文字論が彼以前のアンダルス社会や同時代の思想家が論じた文字学の伝統との関連性について質問があった。この点については、イスラーム思想史において文字学を辿った研究が未だ十分になされていない一方で、文字の神秘主義的思索を行ったアフマド・ブーニー（1225年頃没）やスフラワルディー（1191年没）などの同時代の思想家との具体的な交流はなかったと思われるという応答があった。またフロアからは『ミーム・ワーウ・ヌーンの書』に言及がある数理学者たちについての質問がなされた。

【セッション2：イブン・アラビー思想の地域的展開】

報告4：

「ムガル朝におけるイブン・アラビーの思想的影響——ムヒッブラー・イラーハーバーデ

森口氏の発表では、ムガル朝で活躍したムヒッブラー・イラーハーバーディー（1648 年没）と彼の著作を通じて、南アジア、特にムガル朝インドにおけるイブン・アラビー思想の影響の実態を明らかにすることが試みられた。森口氏は、まず南アジアでの存在一性論の受容史とムガル朝における同論をめぐる動向を概説したあと、イラーハーバーディーの人物像と著作群について、イブン・アラビーとの関連性に触れつつ、説明した。次に、彼の『「叡智の宝石」注釈』アラビア語版およびペルシア語版を取り上げて、いずれの版においても、その序文や本論中の記述などから、イブン・アラビー思想を正しく伝道する、という執筆意図が確認されることを指摘した。続いて、その代表作『賦与と受容の間の等価』において、イラーハーバーディーが説く存在一性論的言説に、イブン・アラビーからの直接的影響が確認される旨が主張された。

報告 5：

「南アジアのイブン・アラビー学派における汎神論思想」

本間流星（京都大学）

本間氏の発表では、南アジアにおけるイブン・アラビー思想の展開を解明すべく、ムガル朝期（1526–1858 年）に醸成された存在一性論の汎神論的解釈が、その後の英領期（1858–1947 年）ではどのように受容されたのかを検証した。英領インドの学者アシュラフ・アリー・ターナヴィー（1943 年没）は、存在一性論の汎神論的表現である「一切は彼なり（*hama ūst*）」をムガル朝期のスーフィーから継承した一方、シャリーアの規範的枠内で解釈することを徹底した上で、当の表現の正当性の根拠をハディースから導き出している。ターナヴィーは、「一切は彼なり」に基づく存在一性論とシャリーアの調和を実現することで、当時のイスラーム改革の要請に応えうる革新的解釈を提示したと言える。

報告 6：

「知と愛の邂逅——イラーキーにおけるイブン・アラビー思想の展開」

井上貴恵（明治大学）

井上氏の発表では、イラン、ハマダーン生まれのイブン・アラビー学派に属するスーフィーであるファフルッディーン・イラーキー（1289 年没）の『閃光』を中心に、イラーキー思想と存在一性論との関わりを検討した。イラーキーと言えばその思想の中心には「愛」の議論が位置づけられるのであるが、検討の結果以下のことが明らかとなった。イラーキーの愛の思想においては、愛という感情が根本的に有する $A \rightarrow B$ という明確な対象性を欠

く点に特徴がある。ペルシア神秘主義において愛という語は典型的に使用される象徴的な用語であるが、やはり愛する者から愛される者に注がれる作用として使用されることが多い。これに比してイラーキーの愛は神が自己を愛するという再帰的な愛の在り方をこそ愛であると定義していた。この再帰的愛の定義に従うのであれば、人から神への作用である到達、あるいは合一の評価は、その本来的でない志向性ゆえに低くなる。なぜなら、愛それ自体に本来である在り方は、ウジュード的、つまり実在化を免れているために遍在的である点に特長があり、何らかの対象を措定する必要がないからである。このような点を見る限り、イラーキーの愛の議論はペルシア神秘主義的な典型例からは外れる傾向を有し、むしろイブン・アラビーの議論を敷衍するものと結論づけることが出来る。

報告 7 :

「引用・解釈・操作——イブン・アラビーとイブラーヒーム・ニヤースの思想的連関」

末野孝典（日本学術振興会特別研究員 PD）

末野の発表では、20 世紀のセネガルを代表するイスラーム知識人であり、ティジャーニー教団の支教団を創設したイブラーヒーム・ニヤース（1975 年没）が 1934 年に執筆した『賢明な者達への警告』を取り上げながら、イブン・アラビー思想のなかでも聖者論に焦点が当てられた。まず議論の前提として、西アフリカ・イスラーム思想研究の現状と当該地域におけるイブン・アラビーの知的伝統について確認が為された。その後、『賢明な者達への警告』には、イブン・アラビーの『マッカ開扉』、シャアラニー著『宝石と宝玉』ティジャーニー教団に属する思想家のテクスト群などが引用され、聖者論が展開される点を指摘した。加えて、イブン・アラビーは極を四人の預言者に当て嵌まるという解釈を採るが、ニヤースはこの解釈を撥無し、ティジャーニー教団の開祖こそ極として相応しい人物であることを論証していたと結論づけた。

質疑応答

藤原氏から本問報告に対して、Hama ūst を最初に用いたのはジャーミーなのかという事実確認が行われた。これを受けて、Hama ūst を最初に用いたのはアッタールであるが、その表現にイブン・アラビー学派の枠組みを与えた最初の人物はジャーミーであると思われるかと本問氏は返答した。また森口報告に対して、本問氏から、報告内で南アジアでの存在一性論受容が始まった時期の代表的思想家として、よく言及されるアシュラフ・ジャハーンギール・スィムナーニーではなく、ハマダーニーを挙げたことの原因が問われた。それに対して、森口氏は、当時の代表的思想家は何か挙げられるが、「地域的展開」というセッションの主旨を考慮して、インド亜大陸に滞在したことがあるハマダーニーを取り上げたと返答した。この回答を受けて、フロアからはハマダーニーがペルシア地方の出自だっ

たことに加え、彼はカシミール地方に一時的に滞在したのみであるから、インドと関係が深いとは言えないとの指摘があった。またアシュラフ・ジャハーンギール・スィムナーニーの人物像には不明点が多い、という補足説明もフロアからなされた。加えて、末野からは、イラーハーバーディーの『「叡智の宝石」注釈』がアラビア語とペルシア語で書かれていることを踏まえて、それぞれの注釈を読んで、イラーハーバーディーのイブン・アラビー理解を把握するとともに、言語による内容の差異の有無を確認することへの期待が寄せられた。その後、フロアからは、南アジアの各文書館が所蔵する、イブン・アラビーおよびその知的伝統に属する思想家達の著作群がどの程度現存するのかを調査することで、南アジアにおけるイブン・アラビーの思想的影響について定量的観点から考察できるのではないか、という提言がなされた。井上報告に対しては、森口氏から西田哲学との比較について質問がなされた。愛を感情ではなく宇宙的な統一力とした西田の愛の議論とイラーキーの愛の議論との類比について、今後のより発展的な議論への布石として、西田の神論を取り入れる試みであると返答した。末野報告に対してはフロアから、ネオ・スーフィズム論はそもそも 18-19 世紀を時代的射程とした議論であるが、なぜ 20 世紀に生きたイブラーヒーム・ニヤースを取り上げる際にこの理論について触れる必要があったのかという疑問が投げかけられた。その受け答えとして、末野は前提としてネオ・スーフィズム論が「近代的な」スーフィズム像の要素を整理することにあり、そのひとつにイブン・アラビー思想の否定があることを述べた。それは 12-13 世紀にイスラーム神秘思想が最盛期を迎えていた時期を頂点とし、以後、神秘思想は衰退していくという短絡的な理解に留まっており、こうした見方を前提としてしまっているため、近現代以降にはイブン・アラビー思想があまり影響力を有していないように理解される傾向にあった。このような偏った見方が一定程度の影響力を有してしまったがために、イスラーム圏の辺境に位置する西アフリカや、近現代で活躍した各地思想家を取り上げたイブン・アラビー思想研究が長らく登場しなかった遠因になったと答えた。

全体コメント

コメント1：東長靖（京都大学）

東長氏はセッション1については、藤原報告に対して円環のモチーフは思想家ごとにどの程度異なるのかという事実確認が行われ、ガーダ報告に対して、靈魂論や修行論はイブン・アラビー思想研究において研究が立ち遅れている分野であるが故に今後の研究に期待が寄せられた。次に、東長氏自身の研究の出発点が「イブン・アラビー学派」研究にあり、イスラームの地域展開について継続的に興味・関心をもって研究に取り組んできたことも相俟って、セッション2のイブン・アラビー学派の地域的展開についてコメントされた。東長氏によれば、世界的に学派研究は少しずつ進展してきており、日本国内でも次世代の研究者によって精力的に研究が押し進められていることが指摘された。具体例として、南アジアを本間氏と森口氏、中国を中西竜也氏（京都大学准教授）、北・西アフリカを末野が中心となって取り組まれていることが言及された。しかし、東南アジア、中央アジア、東アフリカについては世界的にまだ誰も研究に取り組んでおらず、重要な課題として挙げられた。そこで、本シンポジウムの報告では触れることができなかった、東南アジア、より具体的にはマレー世界におけるイブン・アラビー思想の受容史について解説して頂いた。イブン・アラビーの直弟子であるクーナウィーが提唱して以降、存在一性論の基本的枠組みは5次元説だと従来考えられてきたが、それは時代・地域によって見直す必要があることが指摘された。その一事例として、マレー世界で支配的な7次元説が取り上げられた。7次元説は南アジア出身のブルハーンプーリー（1620年没）を端緒とするが、この人物は実際にマレー世界に訪れていない。しかし、彼の主著のひとつ *Tuhfa* の注釈書が当該地域を含めて数多く書かれ続けた結果、マレー世界ではイブン・アラビー思想を最初期に伝えたハムザ・ファンスーリーを除き、7次元説が支配的であったことが指摘された。さらに興味深いことに、マレー世界以外にも、この7次元説が広がっていることが述べられた。以上を踏まえて、イブン・アラビー学派の地域的偏差と時代的偏差について更なる考察が必要であることが指摘された。

コメント2：小倉智史（AA研）

小倉氏からは南アジアにおけるイブン・アラビー思想の特徴についてコメントして頂いた。まず南アジアは、中国には劣るにせよ、文字で残された思想文献の数が他地域に比べて相対的にかなり多いことを押さえておく必要があることが語られた。とくにインドでは古来よりサンスクリット語で書き記された思想文献が膨大にあり、こうした言語空間のなかにイブン・アラビーの思想が入り込んでいくことになるため、ダーラー・シュコーのような混淆的な思想家が登場し、ヴェーダーンタ哲学を軸に据えながら、イブン・アラビー思想を（再）解釈することが念頭に置かれやすいことが述べられた。例えば、ヴェーダーンタ哲学にはさまざまな潮流が存在するが、シャンカラを代表とする不二一元論は絶対者

(ブラフマン) が自己顕現という考え方を持たないため、存在一性論とは基本的に相容れない。それ故に、イブン・アラビー思想の類似点がどこになるのかが問われることになる。その際に、ムスリムが非ムスリム（ヒンドゥー）側の思想に接触し、知的交流を重ねていくなかで、キーワードとしてよく用いられてきたのが *hama ūst* であるが、この表現が果たしてイブン・アラビー思想として受容されたのか否かに関しては、慎重な文献学的検討が必要であることが指摘された。そして、さらなる困難な問題として、南アジアのイブン・アラビー思想の受容の一局面に非ムスリムの関与を挙げることができることが述べられた。例えば、ジャーミー（1492 年没）による『ユースフとズライハ』のサンスクリット語訳としてシュリーヴァラが著した『カターカウトウカ』などを挙げることができる。その際に、非ムスリムが主体的にイブン・アラビー思想の用語を用いて（再）解釈している事態を研究者の側が説明する方法を確立する必要があることが付け加えられた。

コメント 3：鎌田繁（東京大学）

鎌田氏は学生時代にイブン・アラビー思想を研究したいと思い、留学先のマギル大学でナイジェリア出身のイスラーム教徒の友人とイブン・アラビー思想の読書会を開催するが、イブン・アラビーの思想内容が難しいため、この研究会は頓挫した思い出を語られた。また鎌田氏自身が学生るとき、日本では井筒俊彦によるイブン・アラビー研究が僅かにあるのみで研究環境的に厳しい状況であったが、そこから原典へのアクセス状況が大幅に改善されるとともに、若手研究者が積極的に現地に出向いた結果、一昔前に比べてイブン・アラビー思想研究が大きく進展したことは感慨深いと述べられた。続いて、イブン・アラビーの晦渋なテキストを読みとく心意気についてコメントして頂いた。イブン・アラビーの思想テキストがなぜこれほどまでに難しいのかと考えたときに、そもそも彼が言おうとするところは何なのか判らないという難しさ、神と人間のあいだにある絶妙な距離感ゆえに我われの側では言葉化しにくいという難しさ、イブン・アラビー思想体系という枠組みである程度の論理の整合性を目指した議論を組み立てなければならないという研究することへの難しさなどについて言及された。このような難しい障壁が幾つもあるにも拘わらず、若手研究者がイブン・アラビーの思想テキストを真摯に読み取ろうと努力しており、この点を積極的に評価したいことが語られた。最後に、神と被造物の分かれ目にあたる神と人間の間領域をどのように論じるかなど、イブン・アラビー思想はさまざまな角度から分析できることを指摘しつつ、イスラーム思想を研究する醍醐味として言葉の「裏」^{パーティン}をさぐる読みの大切さが説かれた。

総合討論

まず藤原氏から東長氏のコメントに応答するかたちで、イブン・アラビー思想研究において、形而上学的な主題への着目が多いが、修行論や身体論、さらには情動性に焦点を当てた研究が今後探究されるべき課題であることが述べられた。近年の感情史の高まりに着目すると、スーフィズム研究からも新しい視座を提供できる可能性があるのではないかとという意見も交わされた。また小倉氏からイブン・アラビー思想と王権との関わりについても、Melvin-Koushki 氏をはじめとする次世代を担う新進気鋭の研究者あいだで研究が為されるようになってきており、ムガル朝やオスマン朝といったイブン・アラビー思想の影響がある地域において更なる研究の進展が望まれることが述べられた。

次にフロアからイブン・アラビー思想の地域的偏在についてのコメントが寄せられ、末野が主に応答した。まず東アフリカにおけるイブン・アラビー思想の受容と影響については、末野自身が2021年に参加した国際研究会で Michele Petrone 氏が東アフリカのティジャーニー教団の祈祷集を扱った報告のなかで部分的に取り上げられた程度で、それ以外の研究状況は詳しく判らないことを告げた。またアフリカ大陸においてはアラビア語資料の偏在の問題があり、これもひとつの要因として当該地域におけるイブン・アラビー思想研究があまり進展していない可能性を指摘した。さらに、南アジアでは存在一性論の論争が正面から論じられる傾向にあるが、西アフリカでは存在論よりも聖者論の方が議論の俎上に載せられることが多いなど、イスラーム圏のそれぞれの地域においてイブン・アラビー思想の何が主題として論じられる傾向にあるのかを具体的に把握する必要があることを述べた。加えて、澤井氏から末野に対して、セネガルへのイブン・アラビー思想の伝播について、人々の移動を通じた書物や情報の伝達についての質問があった。陸路でマッカ巡礼を行った際に、エジプトのカイロをはじめとした出版産業の盛んな地域を経由したことが影響しないかという質問に対して、末野は、イブラーヒーム・ニヤースが1937年に初めてマッカ巡礼したことを踏まえると、報告で取り上げた『賢明な者達への警告』が1934年に執筆され、そのなかでイブン・アラビーの『マッカ開扉』（標準カイロ版）からの引用と見える箇所が幾つかあることから、彼の父親であるアブド・アッラーフ・ニヤース（1922年没）がマッカ巡礼やティジャーニー教団の聖地フェズを訪問したなかで、同書がニヤース家の手許にあった可能性が考えられることを指摘した。またセッション2の質疑応答でも議題に挙がった各図書館においてイブン・アラビーやその学統を継いだとされる思想家達の著作がどの程度書き写されてきたのか、という基礎的な研究の重要性についても意見交換が行われた。

またイスラーム神秘思想における文字と言葉の関係についてもコメントが寄せられた。澤井氏の報告でも指摘されたように、イブン・アラビーはミーム文字を最初の預言者アダムと最後の預言者ムハンマドの円環的關係を示すモチーフとして用いていたが、このことはミーム文字が両唇音に属することとおそらく関係があり、上唇と下唇が接触すると

いう身体的機能面から二人の預言者を結びつける解釈が施されていた可能性があるのではないかと、末野は応答した。加えて、両唇音に属するバー文字、ミーム文字、ワーウ文字のなかでも、ワーウ文字は文字の位階秩序において最下位に位置づけられているために、先行するそれぞれの文字の性質すべてを受け容れる能力を有するという解釈をイブン・アラビー自身が実践していることも併せて紹介された。このようにアラビア文字それぞれが有する文字の特性・性質を基にした象徴的な解釈をイブン・アラビーは試みているが、それぞれのアラビア文字に対してどのような解釈を施すのかという議論の方向性は、思想家ごとに異なるため、さらなる事例研究が必要であることが確認された。

最後に、フロアから本シンポジウムを契機に、今後どのような方向性でこの研究会を進展させていくのかということが確認された。企画の代表者である末野は、日本において若手研究者がこれほどまでに増え、イブン・アラビー思想研究に取り組んでいる現状は大変喜ばしいことであると語った。この研究会をひとつの転換点になり得るためにするためにも継続的に研究者間の学術的交流を図ることや、海外のイブン・アラビー思想研究者やイブン・アラビー協会（The Muhyiddin Ibn Arabi Society）と連携を取りながら、国際学会などでパネルを組織するなど将来的な展望を述べることで、本シンポジウムを締め括った。

成果

上記の各報告やそれに関連する議論から本シンポジウムを振り返ってみたい。まず、イブン・アラビーとその学統に属する各地域の思想家を専門とする研究者が世代間を超えて集まり、イブン・アラビー思想を主題とする研究会を日本という場で開催することができたという事実それ自体が大きな意味を有すると思われる。近年、日本国内においては珍しいことにイブン・アラビー思想を研究する若手研究者が著しく増えており、今後も継続的な研究会を設定する必要がある。

次に、各セッションについての成果についても触れておきたい。

まず「セッション1：イブン・アラビー思想の新展開」では、藤原氏、ガーダ氏、澤井氏の全員が世界的な研究状況に比べて、日本では殆ど取り上げられていないイブン・アラビーの畢生の大作『マッカ開扉』を軸に据えながら、イブン・アラビー思想を読み解こうとしたことは、鎌田氏のコメントにもあったように、実に素晴らしいことである。また井筒俊彦が『スーフイズムと老荘思想』において、イブン・アラビーのもうひとつの大著『叡智の宝石』に基づいて彼の思想体系を解明しようと試みたが、それは限定的なものであった。というのも、このテキストの資料的性格として、最初の預言者アダムを端緒とし、最後の預言者ムハンマドで完結するに至るまでの計27名の預言者それぞれが神から授かった特別な叡智に基づいた解釈が為されているというある種独特な特徴を有するからである。このような資料的性格をもつ『叡智の宝石』を精緻な資料読解をもとに分析した井筒俊彦によるイブン・アラビー思想理解は、その思想体系のほんの一部に過ぎない。それ故に、『神の経綸』や『ミーム・ワーウ・ヌーンの書』などのイブン・アラビーの晩年の著作以外のテキストにも配慮しながら、イブン・アラビーの思想体系を索る試みは、従来のイブン・アラビーの思想体系とは異なる視座をもたらすと同時に、新しいテーマを「発見」する視点を提供するものであった。こうした研究方法は、国際的な研究レベルでも決して見劣りしない研究水準に達しているように思われる。

また「セッション2：イブン・アラビー学派の地域的展開」では、各発表者がインド、パキスタン、イラン、セネガルで活躍した思想家を分析対象として取り上げ、彼らがイブン・アラビーに端を発する思想をどのように捉え、そこから如何にして（再）解釈が為されてきたのかについてさまざまな角度から議論された。このことは、趣旨説明で末野が指摘したように、日本におけるイブン・アラビー思想研究の最大の特徴として挙げることができる。というのも、海外の「学派」研究は専ら、イブン・アラビーの弟子筋にあたる思想家、もしくは『叡智の宝石』に対する注釈書を執筆した思想家が研究対象として選定されてきたからである。そのため、イブン・アラビーの直弟子クーナウィーの弟子でありながらも『叡智の宝石』の注釈書を執筆していないイラーキー、『「叡智の宝石」注釈』を執筆しているがイブン・アラビーとの師弟関係から外れるイラーハーバーディーなどは研究対象として扱われることが殆どなかった。当然のことながら、本間氏と末野がそれぞれ取

り上げた、アブドゥッラフマーン・チシュティー（1689 年没）やイブラーヒーム・ニヤースは上記二つの条件どちらも満たしていないため、研究対象の埒外に置かれていた。このようなイブン・アラビーに直接的に繋がる師弟関係を越えた思想家を対象とする場合には、より広い視座から「イブン・アラビー学派」という枠組みを捉え直す必要性があることは言うまでもない。そのひとつの方法として、末野はイブン・アラビーの思想的な術語といった「言説」に着目し、それぞれの地域で活躍した思想家がイブン・アラビーに端を発する思想的言説がどのように扱われているのかを慎重に吟味する姿勢が求められることを指摘した。こうした視点で研究を進めていく際に、東長氏からは、イブン・アラビー学派の地域的展開を理解するときの地域間比較の必要性、小倉氏からは、非ムスリム主体がイブン・アラビー思想に対してどのように関与していたのか、という新しい論点を得ることができたと考えている。

今後の課題や研究計画

今回のシンポジウムは、近年の世界的なイブン・アラビー思想研究の進展を辿るべく、二つのセッションを設けた。

セッション1では、イブン・アラビー思想の新展開に着目し、今まさに熱心に取り組まれているテーマが扱われた。その背景には、2000 年代以降、スレイマニエ図書館を中心にイブン・アラビーの思想テキストの写本調査が大幅に進展した結果、従来研究者のあいだで使用されてきた『叡智の宝石』（アフィーフィー校訂版）やエジプトのブーラク社などから出版されている『マッカ開扉』（標準カイロ版）といった主要テキストに対する批判的校訂版が2010 年代に相次いで出版されるようになったことを挙げることができる。そのため、従来の校訂テキストに見られた謬錯の数々はかなり改善されるに至った。それ故に、テキストの読みかたを改めて問い直す必要性が生じている。藤原氏が試みたように、イブン・アラビーが晩年に完成させた二つの大著『マッカ開扉』と『叡智の宝石』で述べられている議論を丁寧に照合させながら、イブン・アラビーの思想体系をひとつずつ検討していく作業は今後とも必要不可欠である。加えて、澤井氏が取り上げた文字論と人名論およびガーダ氏が取り組んだ自己認識論は、まだ世界的にもあまり研究がされていない現状を踏まえると、日本のイブン・アラビー思想研究において重要な貢献と言えよう。しかし、総合討論でも触れられたように、イブン・アラビー思想研究で全く取り組まれていない身体、情動などを対象とするテーマ（例えば、イスラーム神秘思想における礼拝作法の解釈や私をめぐる自己とは何かという問題など）は今後さらなる研究が求められるテーマになり得るだろう。

セッション2では、イブン・アラビー思想の地域的展開に焦点を当てたことで、各地域におけるイブン・アラビー思想の論点を整理することができた反面、イブン・アラビーの直弟子であるクーナウィーの学統に属する思想家への目配りは、井上氏が扱ったイラーキーのみであり、他の思想家にも視野を広げる必要がある。またクーナウィーの弟子達が

『叡智の宝石』に附した注釈は、この注釈伝統の基本的枠組みを附与したこともあり、今後更なる研究の進展が望まれる。森口氏に取り扱ったイラーハーバーディーの『「叡智の宝石」注釈』の事例は、この研究領域において重要な位置を占めるものと言える。また本間氏と末野は、それぞれ南アジアと西アフリカを代表する思想家に着目し、各地域における思想的コンテクストにおいてイブン・アラビー思想がどのように（再）解釈されてきたのかを論じた。これらの報告は、趣旨説明で扱ったように、イブン・アラビー思想をより広い視点から捉え直すための比較材料を提示するのに貢献した。今後は、東南アジアや中国などのイブン・アラビー思想の地域的展開も視野に入れることで、比較するための視座を獲得しつつ、地域ごとの特色を把握し深めていく作業が必要だと考えている。さらに、小倉氏のコメントでも触れられたように、イブン・アラビー思想の地域的展開を考察する際に、思想文献が豊富な南アジアや中国などでは、それぞれの地域で伝統的に根差しているウパニシャッド哲学や老荘思想などの思想コンテクストを有するが故に、そこからイブン・アラビー思想がどのように（再）解釈されてきたのかという困難な問題について検討する必要がある。

上記の内容を踏まえて、今後の研究計画としては、本シンポジウムの内容をもとに来年度中に学術雑誌で特集号を組み、研究成果の発信を図ることを第一目標に定める。また日本におけるイスラーム研究全体を見渡すときに、イスラーム思想文献やある特定分野を代表する研究書の邦訳の少なさは大きな問題点のひとつであり、イスラーム神秘思想研究が継続的に進展するために、各自がイブン・アラビーやそれ以外の思想などの原典の分析や研究成果の発信に取り組むことで、「知のインフラ」を整備する作業にも取り掛かりたい。最終的には、海外のイブン・アラビー思想研究者と協力して、国際シンポジウムを企画し開催する流れにまでもっていきたいと考えている。

謝辞

フィールドネット・ラウンジ企画の公募制度によって、本シンポジウムは可能となりました。本制度を含めたフィールドネットの企画運営を行っている東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の皆様には感謝申し上げます。特に、本企画の採用後から研究会実施にかけての種々の手続きについてご対応頂いたフィールドネット事務局の千葉淑子様、当日の研究会の会場設営等の補助をして頂いた品川大輔准教授に、改めて御礼申し上げます。また、当日の研究会には、発表者・コメンテーターに加え、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の教員の先生方、他大学の教員の先生方、社会人、大学院生、大学院進学予定者、大学生の計22名の方々にご参加頂き大変嬉しく思います。お忙しいところ、本研究会に足を運んで頂いたことに感謝申し上げます。本当に有難う御座いました。

・総合討論の様子（丸山大介氏が撮影）



・集合写真（品川大輔氏が撮影）

